

ADHD 親の会における SST の実践と展望

竹 本 幸 生

1. 目的

本論文では、ADHD（注意欠陥多動性障害：Attention Deficit Hyperactivity Disorder）親の会で行われている SST（ソーシャルスキル・トレーニング：Social Skills Training）などの実践を通して、SST を親の会で行う意義を包括的アプローチの視点から考察し、SST を中心に医療・学校・保護者・親の会の連携についてモデル化すること、母親面接での語りや文献研究を通して親の会で SST を行う特長と限界について検討することを目的とする。

2. 方法

SST のスタッフで、参加している子どもの変化についてのミーティングを行った。ミーティングでは、長期目標となる事柄の変化について、SST の指導領域別の変化について、自由時間についての変化について話し合った。また、親の会の取り組みについて調べる為に、会の設立経緯・SST を開始する経緯・親の会の取り組みについてメールを用いてアンケートを行った。

また、3名の保護者に対して、「子どもの変化を尋ねること」、「親の会の会員として SST についてどのように考えるのか」を尋ねることを目的として半構造化面接を行った。

3. 実践報告

実践報告として、筆者が2年間携わった SST について報告した。SST を通しての子どもの変化について、母親面接で得られた情報とスタッフ会議の記録をもとに2名の SST 場面での変化、学校・家庭での変化についてまとめた。2つの事例を通して、子どもに対して影響力があった事柄として、①「居場所作り」と「自尊心の向上」を目的にスタートしたこと、②毎回スピーチの練習を行ったこと、③「自立」がテーマであったこと、以上3点が共通点として挙げられた。また、般化に影響を与えたと思われる親の会の取り組みとして、①先生勉強会、②保護者懇談が挙げられた。

3. 考察と展望

母親面接を通して、親の会で SST を行う特長として、①トレーニングの構成について（「期間が長いこと」、「メンバーが変わらないこと」、「年代構成に幅があること」）、②トレーニングの内容について、以上2点について述べられた。また、限界として、①内容の設定、②指導者の専門性、③対象者の選定、以上3点が述べられた。

さらに、親の会から見た包括的アプローチの概略図を示した。面接内容と先行研究より、親の会が、家庭・学校・医療機関（専門家）との連携において、キーとなる存在になれることが示唆された。